

地図についての<sup>よしなしごと</sup>由無し言

なにかにつけ地図を手にする習慣がある。毎日とは言わないまでも、かなりの頻度で棚からとっては眺めている。長年の馴染みからくる親しみだろうが、ウェブ上で見る地図と違い、ページの端で切れている道や川をつづきが、その次のページで、ほんの少しずれた場所から始まっていたりするのを面白いと思う。

モーリス・ルブランの「アルセーヌ・ルパン」シリーズは、今でも読むたびに胸躍る気持ちにさせてくれる、爽快かつ切ない物語だが、私にとってこの小説のもうひとつの楽しみ方は、地図を片手に、だった。フランスはすべての道に名前がつけられていて、「ルパン」にも、「〇〇通りの〇番地に忍び込んだ」とか、「〇〇大通りを渡り、車に乗り込み、〇〇橋を走り抜けていく」というような記述がそこかしこに出てくる。道の名前は数百年来、変わっていないところが多いため、フランスで買い込んだ、フランス全土の道路地図とパリの詳細地図をひろげ、本と地図を交互に確かめながらその場所を探していく。あくまでも小説だから架空の話なのだが、出てくる番地はほぼすべて、本当にあるものだった。私が次にしたのは、フランスに行く際に、それらの番地のメモを持っていくこと。単なる確認作業に過ぎないのだが、できうる限り該当地の写真を撮ってくるのが趣味となった。まことに、毒にも薬にもならないことではある。

地図を見るのが好きになったのはいつからなのか、はっきりとは覚えていないが、地理感覚の疎さに起因する苦い思い出があるから、それ以降のことであろうと思う。中学1年生のある日、家での会話の最中、ほど近いところにある修道院が話題になった。そこは、私が小学校高学年の頃、日曜学校に通っていたところである。

話が逸れるが、当時の私にとって聖書やイエス・キリストという存在は、非常に親しく感じられるものだった。未だに特定の宗教信仰を持つには至らないままだし、おそらく一生そうだと思うが、幼い頃に与えられた数々の本のなかに聖書もあって、ギリシャ神話とともに、私はそれらの物語をとりわけ愛して読み返したものである。本を開けばいつでも、

手繰り寄せるような筆致に導かれ、私は物語のなかへ入っていくのだった。だから、すでに日曜学校に通っていた同級生から誘われたとき、まさしくその世界に触れることができるのだと、噛みしめるように嬉しかったことを覚えている。ただ、実際のところ私にとって、聖書に記されたイエス・キリストの言葉は変わらず潤いを湛えていたのとは逆に、そこでシスターたちが統べる日曜学校という規律は、温かみを感じるものではなく、次第に足が遠のいてしまった。

話を戻すが、その修道院の話が出た際に私が、部屋のなかではあるが、修道院の方角を指しながら何か喋ったのだった。すると父が「修道院はあっちだよ」と、ほぼ90度近い角度に違う方向を指差したのだ。思ってもみない方角を示され、私は驚いた。この足で通っていたのだから間違いはない。私がそう言い張ると父は、兄と私を連れて外へ出た。そして、家の裏にある坂道を少し登ったところで立ち止まり、私たちに振り向くように促しながら「ほら、見てごらん」と言った。それは家の中で父が指さした方角であり、私にしてみれば笑止の沙汰としか思えないものだった。然るにその視線の先には、坂の下に連なる瓦屋根と、その先のバス通りの向こうで暗く灰色にそびえる、大きな修道院の建物の上部が見えていた。

それは私が初めて見る建物で、あまりに大きく、異形とすら感じるものだった。瞬時に私は、日曜学校で、修道院の建物の上部を眺めた記憶がないことに気づいた。だから「初めて見る」のだろうか。嘲るように大声で笑う大人げない父と、同じように笑う兄のそばに、ぽかんと口を開けたままの私がいた。「思考と視覚をもって確信していたもの」が根底から覆された感覚は、まるでこの身が現実のものではないようでさえあった。通っていた場所を把握していなかった自分に対する悔しさと屈辱感は、ながらくその出来事を思い返さないでいるほどに私を打ちのめした。加えて、中学校への通学路は別の方角だったので、私はなぜ自分が間違えたのか検証する機会を持たないまま、時折、ちくり、と痛みつつ思い出す以外は、その経験を記憶の奥へ押し込んでいった。

後年、なぜ父と私がまったく別の方角を指したのかが分かった。父が指していたのは「カルメル会修道院」で、私が日曜学校に通っていた修道会とは同じカトリックでも別の組織、

近所ではあるが違う場所にある建物だったのだ。そして、当時の私の家から見ると、その二つはほぼ90度の角度に位置していた。父は、私が通っていた日曜学校、ちなみに兄が通っていた幼稚園でもあるのだが、そこに行ったことが無かったのだと思う。もし行ったことがあるなら、私が「異形」と感じた修道院の建物はそこに無かったはずだからである。話が長くなったが、私が地図をなるべく正確に読み取ろうと努めはじめた原因のひとつに、意識下のこの経験があったことは否めないだろう。地図をいい加減に覚えていると、90度も違う方角へ自分を導くことになる、と肝に銘じたことであった。

とはいえ、予想外の方向間違いを犯すこともあって、しっかり覚えたつもりであるだけに、落ち込む。時おり、南が上になっている地図や、道路や目印が洒落た筆遣いで描いてある案内状に出遭うと、その傾向は著しく高まる。常から洒落たものと縁遠いせいもあるからか、たとえば案内図が10センチ四方程度の時に、道路を示す筆の線と目印の黒丸の間が5ミリくらい離れていると、もういけない。そこは通りに面しているのか、それとも地図に描いていない路地でもあるのか、悩むのである。実際の経験では、どちらの場合もあったし、それが原因で道を間違えたこともある。山出しの人間としては、路地も道なのだから、面相筆でも使って描いてほしいと、切に願うところ大である。

地図もコンパスも無かった時代、旅人は、太陽や星を目印に歩いた。目指すところへ行くのに右も左も定めず出かけるはずはなく、必ず「目印と自分との位置関係」をもとに歩いていく。まずあり得ないことだが、もし目印を設定しなければ、歩きだしたとたん、とつもない不安に襲われることだろう。それは現代でも同じではなかろうか。

いわば人は、目印と自分のあいだに見えない糸を繋ぐのである。それは、自分をたがいなく目的地へ運んでくれる手段であり、奥深い山のなかでも海の上でも、旅の安らかさのよりどころになるもの。ひいては、広大な宇宙のなかで時に埋没しそうな自分の存在が、確かに在るもの、辿り着くはずの場所を持つ確かな存在だという感覚を、ゆるぎなく得られる術でもあったらと思う。その摂理のもと、私も地図を好むようになったのだろうかなどと、よしなしものがたり。